

主要諸元：(20X エアージュシーブレーキパッケージ)

- 全長×全幅×全高/4640×1820×1715mm
- ホイールベース/2705mm
- トレッド/前:1575mm 後:1575mm
- 車両重量/1570kg
- 最小回転半径/5.6m
- エンジン/1997cc 直4
- 最高出力/147ps/6000rpm
- 最大トルク/21.1kg・m/4400rpm
- JC08モード燃費/15.6km/ℓ
- ミッション/CVT
- ブレーキ/前:Vディスク 後:Vディスク
- タイヤサイズ/225/65R17
- 駆動方式/4WD
- 乗車定員/7名
- 車両本体価格(札幌地区)/2,597,700円(消費税込)



インテリアはシンプルで「質実剛健」そのもの。インパネも無駄な装飾がなく、一目で機能が分かるような使いやすいものとなっている。SUV系の車にとって非常に大切な「ダイレクト感」を演出している。



走りも居住性も積載性もと欲張ったクルマがSUVであるが、このエクストレイルはまさにそれらをベストバランスしたクルマと言えるだろう。



クティブライドコントロールはエンジンとブレーキを制御することで、凸凹などの起伏ある路面での姿勢変化や揺れを抑制する。小さな姿勢変化はエンジンの駆動力で、大きな揺れはエンジンとブレーキでそれぞれ抑制する。雪道ではわたちでの走行に大きな力を発揮する。意外なほどに振動の少なさとマイルドな乗り心地を感じるのだ。ステアリングに伝わる不愉快な操舵感と振動が少ない。実際は洗濯板のようなかなりの凸凹道だが、想像するよりもはるかに横揺れが軽減されている。

これも世界初のシステムである「アクティブエンジンブレーキ」は、日常走行時においてに重宝する。コーナーやブレーキ時にCVTのギヤ比制御を行いエンジンブレーキを付加する。頻繁に行うフットブレーキの操作負担を軽減し、ステアリングに操作に集中できる優れたもの。これがツルツル路面でも威力を発揮するのだ。従来のようにギヤダウンをして強力なエンジンブレーキをかける手間がなく、アクセルを緩めればエンジンブレーキを自動的に必要量に調整してくれる。ひと言で表すなら悪条件でも普通に運転できる機能で、安心・安全を強固なものにしてくれる。

なんといっても200万円台の前半から半ばにかけての価格帯の車種であるから、そのコストパフォーマンスはかなり高いといえる。さすがに、SUV界のけん引車のエクストレイルだけに、生半可なモデルチェンジではない。姿かたちも別物になったが、中身も先代に比べて驚異的な進化を遂げていると感した。

■同車初の3列シート車もラインナップ

新型エクストレイルの注目点は、従来の2列シートとともに3列シートもラインナップに加えたことだ。3列シートの場合、最大で7人乗車が可能になる。3列目はプラス2席的な存在になるが、短時間の乗車なら全く問題ない。子どもの送迎が必要になるスポーツ大会などで活躍するのでは。3列目シートはあるとかなり便利なもので、ミニ

■柔らかい流線形が醸し出す造形美

先代までのエクストレイルも、それはそれで確かに良かった。ソコソコしたエクステリアが、硬派なアウトドアの雰囲気を高めてくれた。新型は先代に比べて全長がほぼ変わらないが、全幅で30mm拡大された。フロントビューは、ボリューム感がアップされ、美しい曲線美が映える。ボンネット上のエッジラインが、光源の当たり具合によって絶妙なコントラストを見せる。美的フォルムがかなり強調された造り込みだ。サイドビューは窓枠、ドアノブがシルバークロム処理され、高級感も漂っている。リアビューからはサイドの美しいエッジラインがのび、シンプルでありながらも存在感を際立たせている。

女性にも好まれるようなエクステリアで、硬派、武骨といった先代までの雰囲気は感じられない。硬派な男性ユーザーは180度転換したエクステリアに戸惑うかもしれないが、3代目のエクストレイルは間違いなく大きな進化をしている。その転換はかなり前向きに捉えて間違いない。

流麗な姿も硬派の気質は健在



NISSAN X-TRAIL

■デキスト=有岡 志信(SAフォトワークス) ■Photo=川村 勲(川村写真事務所) ■取材協力=日産プリンス札幌 月寒支店 ☎(011)852-3111

プロフィール

■発売から驚異的なセールスを記録中

おもしろくなってきた。エクストレイルがガラッと雰囲気を変えてきた。いかにも男性的な角張ったスタイリングから変。流線形のボデーラインは、まさにスタイリッシュである。2000年に登場したSUVのけん引車的な存在のエクストレイルだが、3代目は北米や中国の市場を意識し、華麗な雰囲気身をまとって登場した。昨年12月16日にデビューし、発売から3週間で1万1000台のセールスを記録。日産の月間販売目標が2500台であるから、4倍以上の驚異的な売り上げを記録しているモンスターSUVなのである。

姿かたちは優しくなっても「タフギア」ぶりは失っていない。エクストレイルのCMで雪のついたスノーボードを、そのまま防水処理を施したラゲッジスペースに放り込むシーンを思い浮かべる人も多いだろう。ウインタースポーツと切っても切り離せないイメージだ。走りは「なんちゃってSUV」ではなく、雪道や悪路での走破性も先代からのDNAをしっかり受けついでいる。価格帯は200万円台前半から半ばにかけて、ボリュームゾーンでコストパフォーマンス的にも優れた1台といえる。

■世界最先端の機能を詰め込んだ3代目

悪路での走行性能を徹底的に高めた。まずは注目の世界初のシステムを紹介する。「ア



ディーラーメッセージ

日産プリンス札幌 月寒支店
店 長

佐藤 悟幸さん

今回の新型エクストレイルは、デザインを一新しました。特にご家族で来店されたお客さまでは、奥さまからも高評価を頂いております。3代目のエクストレイルは、日産ユーザーなど周りの方々からの意見をお聞きし、参考にして誕生した車です。走りの性能はもちろんですが、オプションも含めて各種安全装備の固まりといった車でもあります。ファミリーカーからの乗り換えを検討されるお客さまも多いです。3列シートのタイプが選べるのも良いですね。



バンからの乗り換えを検討しているユーザーにとっても注目ポイントの二つになるであろう。

室内空間はさらに快適になった。ホイールベースが75mm伸び、後席の居住性がアップしている。後席の座り心地が格段によくなり、膝周りのスペースが広がった。先代に乗っていたユーザーなら、すぐに実感できるポイントだ。横方向も全幅が広がっている分、ゆとりがかなりある。感覚的にも、居住性がかなり高まったのがクルマ全体の上質さにつながっているとみた。

インテリアはインパネ周りが高級路線になった。ステアリングはさりげないシルバーマッキを施し、上質な空間に仕上げた。

もちろん、シート、フロア、ラゲッジスペースには先代よりもさらに高めた防水仕様になっている。

インプレッション

注目の各種安全機能もさらに充実

今回の試乗車はオプションの「エマージェンシーブレーキパッケージ」装着車で、安全装備がてんこ盛りの仕様だ。エマージェンシーブレーキは、フロントカメラ前方の車両や歩行者を検知して、衝突回避操作をしてくれる。車両の四隅に配置されたセンサーによる踏み間違い衝突防止アシストもある。LDW（車線逸脱警報）はフロントカメラによってレーンマークを検知し、意図しない車線変更などの心づきに対して、警告音で知らせてくれる。さらに、日産初の機能として、

進入禁止標識も検知してくれて警告音とデ

イスフレイで注意を促す機能も加えた。

■SUVの旗手として 新たなステージへ

期待と好奇心を持って、新型エクストレイルのステアリングを握った。駆動システムはFF走行の「2WD」、トルク配分をフロント100-50%リア0-50%に制御する「A-UTO」に加え、悪路走破性を高めたフロントリアのトルク配分を50%ずつに固定した「LOCK」の3モードがある。通常の雪道なら「A-UTO」モードで十分な走破性を誇る。少し強引にタイヤの半分近くが雪に埋まる深雪で走らせてみた。「LOCK」モードにしてから突入すると、ボンネットに雪がかぶりながらもスルスル進む。スタックしかけても、とりあえず進んでくれる。前後輪を固定できるLOCKモードの恩恵で、走りに関してかなりの硬派だ。

街中走行でも思ったほど大きさを感じさせず、特に縦列時には上空から見下ろしているような画像が映るおなじみの「アラウンドビューモニター」（オプション）がかなりの効果を発揮する。当初、1.5t超の車重を147psが引っ張るといふ馬力不足も感じたが、実際に走らすと、遅いという感覚がほとんどなく、それ以上にスムーズに回ってくれるエンジンが、日常域での快適なドライビングフィールを演出してくれる。

新型エクストレイルは、本格的なアウトドアを目指す人でもいいし、都市型ユーザーにも満足できるクルマとなった。コストパフォーマンスを考えると最強のSUVかもしれない。日産のクルマづくりに対する考えに、あらためてオマージュを送りたい。